

公開シンポジウム記録

東日本大震災の記録保存とその活用

— 311 まるごとアーカイブスの目指すもの —

日時：2011年10月8日（土）13時～18時

会場：遠野市市民センター（岩手県遠野市）

参加者：約150名

本資料は、2011年10月8日（土）午後に、岩手県遠野市で開催した公開シンポジウム「東日本大震災の記録保存とその活用—311 まるごとアーカイブスの目指すもの」を要約したものです。

シンポジウムの趣旨

3月11日に発生した東日本大震災は、多くの人命を奪い、地域社会に壊滅的な被害を与えました。この経験や教訓を人類共通の資産として1000年先の後世にも伝承し、安全な社会を構築することが現世代の責任といえます。今回のシンポジウムでは、被災地の失われた「過去」の記憶をデジタルで再生し、被災した「現在」と復興に向けた「未来」の映像や資料をデジタルで記録し、まるごとアーカイブすることを目的とした「311 まるごとアーカイブス」のデータ収集と保存の取り組みを紹介し、アーカイブされたデータの活用について議論します。

そのうえで、今回の震災体験を人類共通の資産として世界に発信することについて、アンドリュー・ゴードン、ハーバード大学ライシャワー日本研究所所長を交えて議論いたします。

プログラム

13時～13時10分 開会の挨拶

開催地代表 遠野市 本田敏秋市長

主催者代表「311まるごとアーカイブス」世話人 今村文彦(東北大学教授)

【第1部】アーカイブスの【データを集める】

「311まるごとアーカイブス」のデータ収集の取り組みについて、各サブプロジェクトやプロジェクトに賛同してデータ提供いただける団体等の担当者から、それぞれの取り組みの概要と現状の収集状況について具体的な報告を行う。

13時10分～13時20分

「311まるごとアーカイブス」活動の目的と概況 長坂俊成(独立行政法人防災科学技術研究所、「311まるごとアーカイブス」世話人)

13時20分～14時25分

データ収集の取り組みの紹介

1 KOMプロジェクト(KOM:気仙を大いに盛り上げたい！)

被災地の若者を中心とした画像、映像、インタビュー等のアーカイブ「思い出の品」返却

2 釜石市アーカイブス活動(アイアンハート)

釜石市の緊急雇用スタッフを中心としたアーカイブの取り組みについて

3 気仙沼「311まるごとアーカイブス」(ダイナックス)

映像、画像のアーカイブと展示

4 災害体験のオーラル・ヒストリーの収集(NPO法人夢ネット大船渡)

後世に向けた被災体験のメッセージと避難行動の聞き取り

5 被災自治体の市民記録による災害映像の収集(防災科学技術研究所)

宮城県、岩手県の被災自治体と協働による災害時の動画と写真の収集

6 中学生、シニアを対象とした映像作成ワークショップを通じたコミュニティの復興アーカイブ

(NTTドコモ・モバイル社会研究所、東京工業大学)

7 遠野市等三陸地域地震災害後方支援活動のアーカイブ(遠野市)

行政文書と職員インタビューを中心とした災害対応記録と検証

8 被災地の写真映像記録ボランティアの活動(記録ボランティアのコーディネーター)

9 災害FM放送のアーカイブ(大船渡・陸前高田災害臨時FM局)

- 10 災害ボランティア活動と体験談のアーカイブ(宮城県ボランティアセンター、NPO愛知ネット)
- 11 地場産業の復興アーカイブと民間コマースサイトとの連携(中小企業家同友会気仙地区)
- 12 測量車両による360度映像と測量のアーカイブ(NTT空間情報)
- 13 復興情報杭とスマートフォン等による復興過程の定点撮影とフィールドミュージアム構想(リプロ・KDDI)

14時25分～14時35分 休憩

【第2部】アーカイブスの【データを活用する】

14時35分から16時5分

「311まるごとアーカイブス」のデータの活用について、自治体、大学、企業それぞれの立場から、科学的な災害現象や避難行動の検証、今後の防災・復興計画、防災教育等の視点から議論する。

「パネルディスカッション：データの収集・活用をめぐる課題とアイデア」

登壇者：大船渡市 今野洋二教育長

釜石市 野田武則市長

遠野市 本田敏秋市長

東北大学 今村文彦教授

司会：防災科学技術研究所 長坂俊成主任研究員

16時5分～16時15分 休憩

【第3部】アーカイブスの【データを世界に発信する】

16時15分～17時50分

今回の震災体験を人類共通の資産として世界に発信することの意義と今後の課題について議論する。

「パネルディスカッション：震災体験を世界に発信」

登壇者：畑祥雄(関西学院大学教授)

今村文彦(東北大学大学院教授、「311まるごとアーカイブス」世話人)

吉見俊哉(東京大学教授、「311まるごとアーカイブス」世話人)

アンドリュー・ゴードン(ハーバード大学教授・ライシャワー日本研究所所長)

司会・コーディネーター：徳山喜雄(朝日新聞社)

閉会の挨拶 (防災科学技術研究所：長坂俊成氏)

17時50分～18時

共 催：サイエンス映像学会、独立行政法人防災科学研究所、「311まるごとアーカイブス」

後 援：学会連携プロジェクト

【第1部】 アーカイブスの【データを集める】

【司会】 それでは、シンポジウムを開始いたします。最初に、今回このシンポジウムを開催する場所を提供していただきました、遠野市の本田敏秋市長に開会のご挨拶をいただきたいと思います。市長、よろしくお願いします。

膨大な記録を生きた教訓として伝えたい

【本田遠野市長（写真右）】 こんにちは。この東日本大震災は今日でもって210日を経過し7か月になろうとしています。この現代の21世紀の日本で起きた大変な災害であったわけであります。今でもって、行方不明になられた方で家族の元に戻れない方、まだ身内を捜し求めている方がいるというこの現実の中に、私は今般の東日本大震災のすさまじさというものが表されているんじゃないのかなと思っているところです。



このすさまじい災害であったということの一方におきまして、カメラやビデオ、あるいは携帯電話やインターネットなどを通じて、人類の歴史の中でもこれほど多くのメディアやコンテンツに記録されたという災害も、過去には例がなかったのではないのかなというようなことを、さまざまな情報誌や多くの識者の発言からも、私もまさに事実であるというふうに感じているところでもあります。

さまざまな映像を見ながら、真っ黒な、あの黒く押し寄せてくる津波の恐ろしさということも映像を通じて知りました。しかも、これがまた現実の場にあったのであれば、どれほどの恐怖であったのかということも、一つの事実として認めざるを得ない、という部分があるのではないかと考えております。

こういった膨大な記録を後世に伝え、文字どおり生きた教訓としていく上で、今日のこの企画は、私は大変、大変大事なものではないのか、大きな意味を持っているというようにも理解しているところです。

遠野市にとっても大事な支援となる

本日は、この場にハーバード大学ライシャワー日本研究所のアンドリュー・ゴードン所

長さんにもおいでいただいております。そしてまた、東北大学の今村教授、東京大学の吉見教授、関西学院大学の畑教授、大学関係者の皆様がこうしてお揃いであります。

そしてその他にも、まさに現場で大変な陣頭指揮をとっております釜石の野田市長さんはじめ、陸前高田市あるいは大船渡市といった行政関係者の皆様もみえての議論ということに位置づけられております。沿岸被災地の市町村の皆様は、私も市長という職をしておりますけれども、この発災以来、大変な、大変な、まさに市民の安心・安全ということに、不眠不休の中で陣頭指揮をとっているわけであります。その中において、今日ここに駆けつけていただき、この膨大な記録をいかにして後世に伝えるのかという取り組みにも参加いただきましたことに、心より敬意と感謝を申し上げたいと思っている次第でもあります。

この被災地の失われた過去の記録をデジタル化し、それをきちんと記録し、再生する、被災した現在のこの姿を、未来の映像にきちんと資料としてデジタル化しながら記録していくというこの作業も、私は大変、大変重要なものであると思っております。この遠野市をこのような形での企画として位置づけていただきましたことに感謝も申し上げます。後方支援活動を展開してきた遠野市にとっても、たいへん大事な支援の一つの役割ではないかと思っております。

犠牲になられた方々に対する残されたものの役目でもある

おにぎりを送り続けた、救援物資を送り続けた、それでもって後方支援活動が終わったという気持ちは、(遠野の) 3万市民は持っておりません。これを文字どおり後世にこの災害の記録といったものをきちんと伝えるか、新たな仕組みを築き上げていくかということが、多くの犠牲になられた方々に対する我々の一つの役目であり、一つの立場ではないのかなということも思っています。

このシンポジウムはインターネットを通じて全国に生中継されていると聞き、大変な方々が、200人に満たないこの小さな会場から全国のネットワークに、あるいは世界のネットワークにつながるという役割もあるんだということに、改めて緊張しているところでございます。

5時間に及ぶこの長時間の議論が、震災のこの機に、新しい時代にふさわしい仕組みとしてつながっていく場となることを心からご期待申し上げまして、地元としての挨拶にかえさせていただきます。

ありがとうございました。(拍手)

【司会】 本田市長、ありがとうございました。

それでは続きまして、「3 1 1 まるごとアーカイブス」という活動の世話人の一人である、東北大学大学院の今村文彦先生にご挨拶いただきます。

過去—現在—将来の時をつなぐ

【今村（写真右）】 東北大学の今村でございます。世話人の一人としてご挨拶をさせていただきます。

今回の大震災、未曾有の被害を受けました。我々、東北大学で津波の研究を数十年にわたって行っておりますが、2004年スマトラ、またこの三陸の地におきましては明治三陸に匹敵、またはその内容におきましてはそれを上回る被害でございました。東北大学でも亡くなった学生を含めて多大な被害を受けました。まだまだ復旧の途上でございます。



そういう中で、我々は2つのことをつなげたいと思っております。1つは時をつなぐことです。今回震災を受けて過去の記憶というのは残念ながら無くなったわけですが、それを再生する努力が必要だと思っております。2つ目は、今回の状況をしっかり記録すること、現在でございます。3つ目はその現在から将来に向かって、この復興の姿をきちんと残していく、これが後世にとっても非常に重要であるかと思えます。過去—現在—将来の時をつなぐことです。

地域や国内外の人々をつなぐ

また、もう一つは地域をつなぎたいと思っております。被災の地域、またそれを支援する地域、国内外のいろいろな方をつなげたい。そういう意味で、このアーカイブというのはまさにその中心的な役割を担っていると思っております。今現在、6か月たって、さまざまなデータが取れ始めてきたわけですが、まだまだ課題がございます。その課題を今日皆さんと一緒に議論し、またそれをどう活用するのか、現在において、また将来においてどう復興につなげるかというところを話し合いたいと思えます。

現在、我々、大学等で復旧の支援を考えているわけですが、やはり歴史的な視点というのが大切です。過去も同じような被害を受けました。現在も受けており、それから復旧を

目指しております。現在と過去を対話するもの、それが歴史であるかと思います。過去を学びながら、今、我々には多くの課題がありますが一緒にそれらを解決していきたいと思っています。どうぞ、本日よろしく願いいたします。(拍手)

【司会】 今村先生、ありがとうございました。

それでは、これから第1部を開始したいと思います。第1部は、この「3 1 1 まるごとアーカイブス」にかかわっている沢山のプロジェクトがございますが、その関係のプロジェクトを1つずつ順番にご紹介したいと思います。

それでは、スクリーンの用意をお願いします。皆様、お手元に資料があると思うのですが、その資料の順番に従ってこれからご紹介したいと思います。最初にシンポジウムの目的、趣旨につきまして、この「3 1 1 まるごとアーカイブス」の世話人の一人、独立行政法人防災科学技術研究所の長坂から、皆様にご挨拶させていただきます。

復興を支援していく応援団を広げたい



【長坂（写真左）】 防災科学技術研究所の長坂と申します。私どもは国の防災研究機関でございます。被災直後からこちらの遠野市、大船渡、陸前高田、住田町、または宮古、釜石に行き、被災地の方々に私たちは何を貢献、お手伝いができるのかということで、このアーカイブのプロジェクトを、地域の被災した自治体さんまたは地域のコミュニティの方々のご要望等を聞きながら、進めさせていただいております。

今日は、実際に地域の方々と一緒になってこのアーカイブを取り組むなかで、まずどういうミッションで、どういうコンテンツが、どういう思いで集められているのか、またどんな課題が今後あるのかというようなことを、実際のなるべく生の携わっている方々の声を聞きながら、1部を進めさせていただきたいと思います。

先ほど本田市長からもございましたが、被災地はまだまだ復興の緒についたばかりということで、多くの犠牲になられた方々に、改めてお見舞い申し上げます。今回、一緒に被災地を盛り上げていこうとシンポジウムを催しましたが、何か外から来た方々がいろいろな思いでやられて、それで終わってしまうということが多々あるかと思います。今日は、さらに被災地の復興を支援していく、皆さんがさらなる応援団を広げていくというシンポ

ジウムにしていきたいと考えていますので、半日になりますけれども、どうぞよろしくお願いいたします。

進行は防災科学技術研究所の坪川さんをお願いしたいと思います。(拍手)

【司会】 長坂さん、ありがとうございました。

それでは資料で概要を説明させていただきます。シンポジウムの目的につきましては、今、長坂からご説明したとおりですが、次のページに今日の予定が書いてあります。第1部、「アーカイブスの【データを集める】」というところから開始したいと思います。

全体の第1部でご紹介するこのアーカイブスのプロジェクトは、1番から13番まで13個ございます。今もこれは増え続けております。基本的にはこの災害によって沢山の記録が失われてしまうことを防ごう、ということがまず第一にあります。そのために、さまざまな情報を集めていくということにありますので、それについて順番にご紹介したいと思います。

KOM～気仙を大いに盛り上げたい！

では、1つ目のプロジェクトからご紹介したいと思います。

大船渡、陸前高田の若者を中心とした画像、映像、インタビュー等のアーカイブ、KOMです。KOMとは「気仙を多いに盛り上げたい！」の頭（文字）をとってKOMとなっております。そのプロジェクトについてご紹介します。

現在の活動地域は大船渡市と陸前高田市ということでございます。活動体制といたしましてはインタビュー、映像取材活動、陸前高田、大船渡出身の4名の方々が今おります。その方々をご紹介します。どうぞ立ち上がってください。これがKOMのメンバーです。皆さん、拍手をお願いします。(拍手)

ありがとうございます。彼らはこの被災地の出身で、被災者の家族でもあり、被害者自身でもあります。現在、この方々は寄付金にて1年間雇用されているということで、地元NPO、行政、産業界、学校、地域コミュニティとの協働で活動しているという状況であります。活動内容は、流された写真・アルバム等の返却活動。これは陸前高田の緊急雇用による臨時スタッフ2名の方がいます。それから、NPO等被災地域外のボランティアスタッフ、民間事業者との協働で行っているということになっています。

活動状況がそこにIからIVまで出ていますが、復旧・復興過程の取材と編集、ホームペ

ージ等への公開ということです。現代の若者ですので、こういうパソコンの技術、インターネットの技術に長けておりますので、地域の被災の状況について、情報を発信していくという活動を中心にやっていただいております。これは被災者の避難生活、復興過程の調査、それから災害ボランティアの活動、ボランティアの体験談を集めるとか、地場産業、商店等の復旧・営業再開の取り組み等がございます。

2 番目として、津波で流された写真やアルバム等の保存・洗浄・返却活動があります。

3 つ目が被災前のまち並み、風景、文化財、伝統行事、イベント等の映像収集とデジタル化というのがあります。

4 番目に住民による映像記録支援ということで、これは後でプロジェクトとしてご紹介しますが、被災地でつくった、地元の方々がつくった情報発信の一つの手段として映像記録というのがありますが、そのワークショップの支援もしていただきました。

次のページに写真で活動状況が載っています。いろいろな形の活動が行われているということでございます【写真】。



主な成果、コンテンツとしましては、地域の復興の取り組みを写真、ビデオ、インタビュー等で取材し、eコミュニティ・プラットフォームに順次公開ということになっています。

このeコミュニティ・プラットフォームというのは、私どもの防災科学技術研究所が開発したインターネット上のソフトウェアでございまして、地域の方々が、特にコンピューターの専門的な知識がなくても、いろいろ

KOMプロジェクト in 大船渡

311まるごとアーカイブス > 大船渡市 アーカイブス > KOMプロジェクト in 大船渡

グループサイトマップ

- 大船渡市 アーカイブス
- KOMプロジェクト in 大船渡**
 - インタビュー記事
 - 生活情報
 - メッセージ へさまざまな思いをこめて
 - 復興ギャラリー
 - その他(法人、会

新着情報!

2012年1月04日 15時41分

KOMから今年の抱負

2012年、仕事初めの今日1月4日、KOM4人の愚気込みを投稿します。

残すところあと3ヶ月になりました。今までとは少し違った内容で活動を始めます。自分がやるべきことを明確にし、それを実行していきたいです。身につけられることは一つでも多く吸収して、成長していきたいと思ひます。

千葉 千葉

KOM Project 発達!

KOM とは
Kesen wo Oni Moriageta
— 気仙を大いに盛り上げたい —
という頭文字に由来しています!
KOM— なかの人はこんな人

ろな情報をブログに書き込んだり、写真を張りつけたり、動画で公開したりということが
できるようなソフトウェアになっています。これを使って情報を発信していただいている
ということです【右図（KOMプロジェクトin大船渡）】。

事業者や商店等の営業再開の取り組みを、マップにて公開することになっていきます。これはKOMの活動しているページにはこの地図で、どういうところの商店が動いているというのが見られるようになっていきます【地図下】。

インターネットの画面は、別にこちらにご用意したディスプレイのほうでも出るようになっていきますので、こちらでござんいただければと思います。

それから、地場産業等のeコマース、これもまた別のプロジェクトで公表しますけれども、結局この地域で活動しているアーカイブに関する取り組みのほとんどすべてを彼らが集めて、情報発



信じていただいているという形になります。取材から発信までという形になります。

次が今後の課題と展開ということですが、現在の活動の課題としましては、行政や地域コミュニティの復興まちづくりの計画、事業推進をめぐる会議や意見交換会を記録していくという問題があります。それから仮設住宅や仮設グループホーム、仮設商店街等の長期的な継続取材をする必要があります。それから避難行動や被災体験、後世へのメッセージのより多くのインタビューの収集が必要になるということです。

被災地でいろいろな復興会議が行われているのですが、なかなかこういう若者がかわることがないので、そういう意味では、若者の目線で被災者の状況を把握していくという貴重な活動ではないかと思います。今後の展開としては、地域コミュニティとの連携・協働を強化し、多様な復興活動を収集する、仮設住宅等被災地のコミュニティへの情報提供と広報活動支援というのがあります。

ということで、KOMのメンバーの活動をご紹介しました。長坂さん、これに質問とかございますか。

【長坂】 実際にかかわっている4名の方々と、今、集めていくときにいちばん苦労して

いる点ですとか、また今後の課題として挙がっている、地域から情報を集めるだけじゃなくて、逆に発信もお手伝いしていくというようなことをどうやっていけばいいか、というような視点から少しコメントをいただければと思います。

【千葉（KOM）写真】 僕たちがつくっているホームページがあります。そこに、イベントに行き取材して撮ってきた写真だとか、市民の皆様に聞いたお話なんかをちょっとアップしています。これからもホームページで、やっぱり地元の僕たちにしか聞けない声というのがあるので、そこを強く意識して、そういう声をホームページなどにアップしていければいいかなと思っています。



【司会】 ありがとうございます。KOMの活動にはいろいろなものがありますが、そのホームページ（大船渡：<http://311archives.jp/group.php?gid=10295>、陸前高田：<http://311archives.jp/group.php?gid=10291>）にアクセスしていただいて、地域の若者がどんなことを言っているのかというのをぜひ聞いていただければと思います。

アイアン・ハート～様々な教訓・写真・映像・想いの収集と整理、検証

【司会】 続きまして、次はちょっと新しいのですが釜石のほうへ行きたいと思います。釜石、ここも大変大きな被害を受けた所でございますけれども、ここでもアーカイブの取り組みが行われております。チーム名がアイアン・ハートと言います。釜石は鉄の町ですので、それにちなんでアイアン・ハートという名前になっています。「様々な教訓・写真・映像・想いの収集と整理、検証」ということになっています。現在活動しているのが、こちらにも4人の地元の方です。釜石市在住の方4人、今ここにきていただいております。

じゃあ、アイアン・ハートのメンバー、ちょっと立ち上がってもらえますか。ありがとうございます。今日、このシンポジウムの受付もやっていただきました。ありがとうございます。（拍手）

現在の活動状況としましては、復旧・復興の取材と編集、ホームページ等への公開ということで、今被災地でアーカイブの一つの重要な活動を行っています。災害の記録を集めなければならないという状況にあるのですけれども、インターネットの時代であっても、

実はなかなか記録が集まらないんですね。それで、地域の方々がまめに取材をされたり、まめに回っていただいて、写真とか動画を集めてもらっています。地元に行っている方々にご活動いただくというのが、とても重要なことになっています。それから復旧・復興過程のまちなみ、風景、イベント等の取材、地場産業、商店等の復旧・営業再開の取り組みということで、こういうを集めて情報発信していくという形になっています。

2つ目として、被災前のまちなみ、風景、文化財、伝統行事、イベント等の映像収集とデジタル化ということで、被災地で失われてしまったものについても集めるという活動をしています。次が活動の様子ということで写真が載っております【写真】。



現在、この釜石のインターネットのページにはたくさんの情報が出ていますが、主な成果・コンテンツとしましては、地域の復興の取り組みを写真、ビデオ、インタビューなどで取材して、eコミュニティ・プラットフォームにて順次公開しています。

<http://311archives.jp/index.php?gid=10163>

それから、事業者や商店等の営業再開の取り組みについてもマップで公開しているという状況です。また、ユーチューブとかニコニコ動画というのがありますが、

釜石市 アーカイブス

失われた地域の「過去」の記憶の再生

被災した「現在」を記録

復興に向けた「未来」を記録

311まるごとアーカイブス > 釜石市 アーカイブス

メニュー

防災マルチプル電子図鑑 製作発表会 12/15 12/16 東京

復興地図センター

シンポジウム 2011/10/18 14:30 東日本大震災の記録とその活用

「311まるごとアーカイブス」とは？

記憶と思い出の再生 過去

津波で流されたアルバムや写真の伝達とデジタル化

ようこそ釜石311まるごとアーカイブスへ

釜石市における311まるごとアーカイブスの取り組みは、このwebページから発信していきます。

(1)URLについて

本サイトを紹介する時は、以下のURLをご紹介下さい。

<http://311archives.jp/hp/kamaishi-city>

(2)釜石市内でのイベント情報や釜石市専用のお問い合わせ連絡先などについて

釜石市専用の情報は右側の列に記載しております。

そちらのリンクからご覧ください。

釜石311まるごとアーカイブス 各種情報

釜石市における「311まるごとアーカイブス」の取り組みについて最新情報をまとめました。

釜石市に関するニュース・イベント情報

イベント情報・レポート

まちの現状と復興

生活情報

311まるごとアーカイブス「アイアン・ハート」連絡先

釜石アーカイブス連絡先

それにアップされているサイトの動画も集めさせていただく、という活動をしているということです。

-13-

課題と展開ですけれども、行政や地域コミュニティの復興まちづくりの計画や、事業推進をめぐる会議や意見交換会を記録する、これはこちらの大船渡等と同じになります。また、仮設住宅や仮設グループホーム、仮設商店街等の長期的な継続取材、避難行動や被災体験、後世へのメッセージのより多くのインタビューの収集ということが課題になっております。

今後の展開としましては、「記録」と「記憶」、様々な教訓・写真・映像・想いの収集と整理・検証・定点撮影・復興杭（別のプロジェクトで紹介）、それらのピックアップ、地域コミュニティとの連携・協働を強化し、多様な復興活動を収集する、仮設住宅等被災地のコミュニティへの情報提供と、広報支援活動ということになっております。

今度は私のほうから一つご質問したいと思います。アイアン・ハートの皆さんは、先ほどの若い人たち（KOM）より成人されている方々が多いんですけれども、今日は有名な釜石市長さんにお越しいただいています。釜石市の将来を憂いている若者として、この場を借りて市長に何か一言言っておきたいことがあったら、ぜひご発言いただけませんか。



【柴田（アイアンハート：写真左）】 釜石アーカイブスの柴田です。今は動画や写真がなかなか集まらない状態ですし、市との連携も図りたいと思っておりますので、よろしくお願いします。（拍手）

【司会】 ありがとうございました。

釜石市長には、後でごあいさつをいただきます。市長は「撓まず屈せず」ということで、地域がこの災害で「撓まず屈せず」の精神で、ぜひ立ち上がっていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

ダイナックス～気仙沼の映像、画像のアーカイブと展示

それでは3つ目のプロジェクト、これは気仙沼でございます。気仙沼は宮城県ですが、こちら（岩手県）の大船渡、陸前高田とはほとんど地続きのような形で、気仙地域として一体的に動いている所でございます。「気仙沼の映像、画像のアーカイブと展示」ということで、今日は気仙沼で活動しているダイナックスさんに来ていただいております。

現在の活動状況ですが、
気仙沼市出身者の2名が常勤
しており、気仙沼市危機管理
課の全面協力をいただいて、
いろいろやっているというこ
とです。気仙沼もご存じのよ
うに火災が起きたことがあつ
て、相当ひどくやられていま

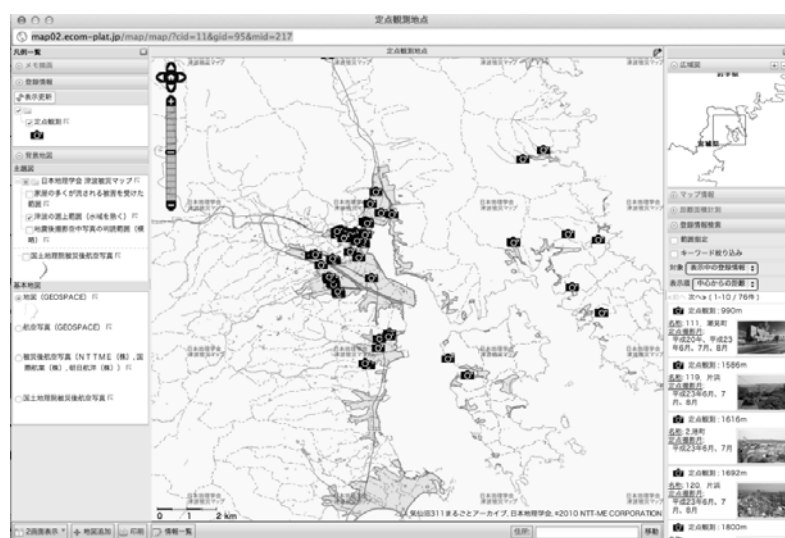


す。こういうNPOもそうですが、活動する場所の確保からスタートしなければならない
ということで、今、市が全面的に協力しています。

活動状況としては、地元写真家集団「鼎（かなえ）」と連携した定点観測、これは市内1
00ポイントということで、後ほどご紹介しますが気仙沼には大変たくさんの写真が集め
られています。提供していただいた写真を使った写真展も開催しています。気仙沼向洋高
校の生徒会・写真部、江戸川区等で催されているということです【写真上：気仙沼市役所
での被災前の写真展示】。

それから神戸大学、横浜市立大学「記憶の街」ワークショップ（模型づくりワークショ
ップ）と連携して、オーラル・ヒストリーといって、災害を体験された方がご自分でしゃ
べられたことを記録しています。ブログによる発信・周知・記録、NPO・ボランティア
とのネットワーク構築ということで、情報交換、協働事業の検討をしているということど
す。

それから、下のほうに
地図がございますが【地
図右】、これが定点と呼ば
れているものです。この
地点は個人の敷地ではな
く、誰がそこで写真を撮
っても大丈夫な場所とし
て、これから地域の変化
を見ていく大事な所を定



点と呼んでいます。そこにカメラのマークが出ていますが、ここの写真・記録を残しておくことで、この災害をデジタルで保存しようということでございます。右側には記憶の街ワークショップ、模型づくりワークショップの写真が載っています【写真下】。

主な成果、コンテンツですが、これもブログで活動状況等を発信中ではありますが、まちの復興過程の記録、大島フェリー航路（大島は気仙沼港の外にある大きな島）と、港町の定点観測等をeコミマップで発信したり、避難行動の調査、聞き取り結果をまとめたり、収集した写真を活用した写真展を通じた市民・全国各地への情報発信、というのをやっただいております。

課題と今後の展開ですが、ネットワーク、常勤スタッフだけでは十分に動けないため、地元組織、市外から支援に入っているNPOとかNGOと連携したプロジェクトの展開が必要だということです。今後の展開としては、地域の実情を多角的に記録していくとともに、市外、県外、海外への積極的な情報発信を目指すということになっております。

ダイナックスさんもぜひ、何かコメントお願いできますでしょうか。



【津賀（ダイナックス：写真左）】 気仙沼でこのプロジェクトを進めています津賀と申します。現地のスタッフと一緒にやっていますが、いろいろな方からお聞きするのに、復興というものの感覚がやっぱり一人ひとり違うというのがあります。支援に入られている人の情報というのも多々あります。やはりいろいろな方とつながりながら、この復興の過程というのを記録していきたいと思っています。また、気仙沼のほうに来られることがあったら、市役所のほうに事務所があり

ますのでぜひともお立ち寄りください。よろしくお願いします。(拍手)

夢ネット～災害体験のオーラル・ヒストリー——被災体験者からのメッセージと避難行動の聞き取り

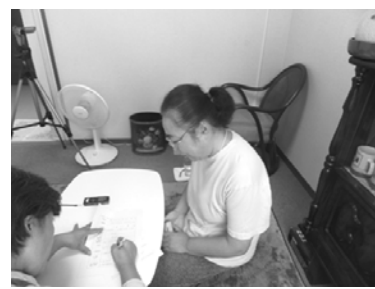
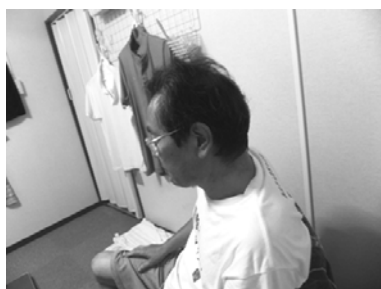
【司会】都賀さん、ありがとうございました。

次は4番目、「災害体験のオーラル・ヒストリー」、被災体験者からのメッセージと避難行動の聞き取りをしています。実は今回、津波によって多くの方々が避難はしたものの、避難場所が適切でなかったり、あるいは避難ができなくて、あるいは避難しなくて亡くなられた方がたくさんいらっしゃいます。亡くなられた方にはもう声を聞くことはできないのですが、生き残った方々がどんなふうに避難したのか、そこにどんな問題があったのかということ、なるべくきちんと記録しないと次の災害のために生かせませんので、それを聞くということをやっています。

それから、災害を体験された方々が後世に何をメッセージとして残したいのか、それを集めさせていただいて発信していくということです。現在の活動状況ですけれども、第1期として、9月末まで大船渡地区を中心に50名の方々にインタビューをしました。体験者の声、未来の被災者に残したいメッセージということで、現在ウェブに50名の方々の短いメッセージを集めて公開しております。これは専門家が行ってインタビューをするのとは違って、地域の方に自由に語っていただいていますので、誰でもインタビューはできます。現在地域で活動しているNPOの夢ネットさんに今日はお越しいただいています。

夢ネットさん、どうぞ。(拍手)

一応個人情報結構かかっており、お名前はちょっとお出ししないということで、今回は活動の様子を見ていただきます。ここに写真が出ていますが、インタビューしたのを公開するのに、ご本人が同意したということのお名前を書いていただいたり、おおよその年齢とか性別、地域というぐらいだけでお名前は出さない形で、公開させていただいています【写真下】。



次の音声は、インタビューした方が実際に発言した一つのメッセージのサンプルです。
ぜひ聞いてください。

【録音再生】

「ほんと被災に遭ってね、まあ、ほんとに恐ろしかったです。逃げるときも孫たちの手を引いて高台に逃げました。それで、そのまあ、その孫たちにも、これがその津波なんだって、すごくおっかねんだからって、よぐこの津波のごどを忘れないで、その見どげって言ったら、ほの孫たちも身を乗り出してこう見ました。その孫は6歳と4歳です。それでまず、はあ、おっかねんだなあって感じたのは、高台で眺めた範囲のごどです。

sonでまず、いち早くまず避難することが大事だと思います。それで、まず、今はその貴重品とか身の回りの物は、寝るときは懐中電灯、まあ、貴重品、まずそろえて、まず常に即避難ということを心がけています。

あれですか、1,000年後っていうと、やっぱり今どは時代が変わる、変わっておると思います。まあ、我々もこの世には存在しないけれども、まず、その津波のよぐ大きさにはもう変わりないと思いますから、まあ、常に避難ということを頭には置いて、まず過ごせるほがはないと思います」

【司会】 はい、ありがとうございます。これは大船渡市赤崎町に住んでいる女性（65歳）の方の声ということになります。

じゃあ、次お願いします。今のはちょっと長いんですけど、311アーカイブスにはもっと短いメッセージが50件ほどあり（今はもっと載っています）、他に長いのをこれから整理して、公開していこうということになっています。

課題ですけども、実はインタビューするのになかなか時間がかかって、仮設などへ行ってお話を伺うのですが、被災者の中にはまあ大変つらい体験だったんで、語れないという方もいらっしゃいます。それでもご協力して、ぜひ一言話しておきたいという方は結構いらっしゃいますが、やっぱり時間がかかるということで、今のところわりと高齢の方中心の取材となっています。ですから壮年層、若年層への聞き取りが少ないという問題があります。

それから、時間がたつとやっぱり皆さんのメッセージが大分変わってくるんじゃないか、

ということです。今は仮設に入っていて、被災当時の辛い体験は結構生々しいわけですが、これから復興していくにつれて別のいろいろな課題が出てくるだろうと。それもまた地域の声ですので、集めていく必要があるのではないかとということです。今後の展開としては、地域である程度まとまった集団、例えば子ども会のお父さん、お母さんですとかにグループで話を聞くとか、アンケートのようなわりと簡単に声を寄せていただく仕組みをつくろうか、ということを検討しております。

これは長坂さん、何かご質問とかありますでしょうか、実際の当事者の方々に。

【長坂】 ぜひ、夢ネットさん、今日来ていただいているので、今後どういう形で地域と、また行政の方々のご支援もいただきながらこれを進めていけばいいのか、というようなことを少しコメントをいただければと思います。

【鈴木（夢ネット：写真右）】 一応、すぐ入っていくというのは難しいようなので、前の日あたりに行って、「明日来ますのでお願いします」というようなことでやってきました。もう少し入って行って、砕けた話で何か質問するようなことがあれば、もっと気軽に聞けるんじゃないかな、という感じがしました。やはり被災した方々でするので、思いっきり最初からぶっつけ本番でやるというのは難しかったですね。



被災自治体の市民記録による災害映像、画像の収集

【司会】 ありがとうございます。ということで、ぜひ、被災者の声というのを残したいと思いますので、これにご協力いただける方は、大船渡でしたら夢ネットさん、あるいは私どもの研究所のほうへ直にいただいても結構ですので、ぜひご連絡いただければと思います。

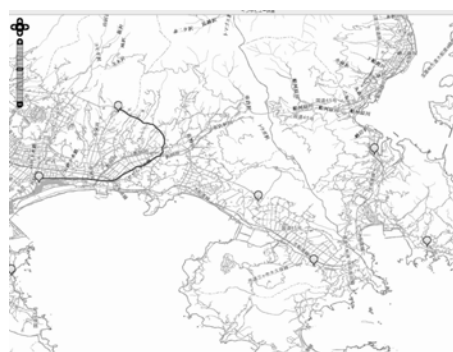
それでは、5番目のプロジェクト、「被災自治体の市民記録による災害映像、画像の収集」ということで、これは実際に被災した地域の住民の方々が撮られたビデオですとか、写真ですとかというのを集めるという形をしております。これはかなりあるのですが、一時期はもうユーチューブなんかにはたくさん載ったんですけども（今は大分減って少なくなって

います)、これも市民の方々に呼びかけて集めさせていただいております。

撮影場所が特定できるものにつきましては、eコミマップというのがあります。これは私どもの、eコミュニティ・プラットフォームというシステムで使っている地図ソフトがあり、地図でその地域の情報を管理していくことができるようになっています。どこにどんな写真が撮られたかということ、空間的に特定してやっていくということでもあります。

これまで26名の方々から、約3,200枚の画像と75本の動画をご提供いただきました。これは住民の方々ですが、岩手県と宮城県の被災自治体からは、県を含めて市町村全部に声をおかけしまして、その結果、1万5,000枚というかなりの分量の画像と動画をご提供いただいています。今日はその一部をご紹介します。

最初にご紹介するのは、これは陸前高田市の小友町という所です。地元の方はご存じですが広田半島というのがあり、左手が広田湾、右手が大野湾という2つの湾から津波が入ってきて、真ん中の低地の部分が両方から来た津波でぶつかってしまって、完全に分離してしまったという場所です【地図右】。これは、高台の所から左側から来る津波と右側から津波がぶつかっている所を捉えたという、非常に貴重な写真です【写真左】。



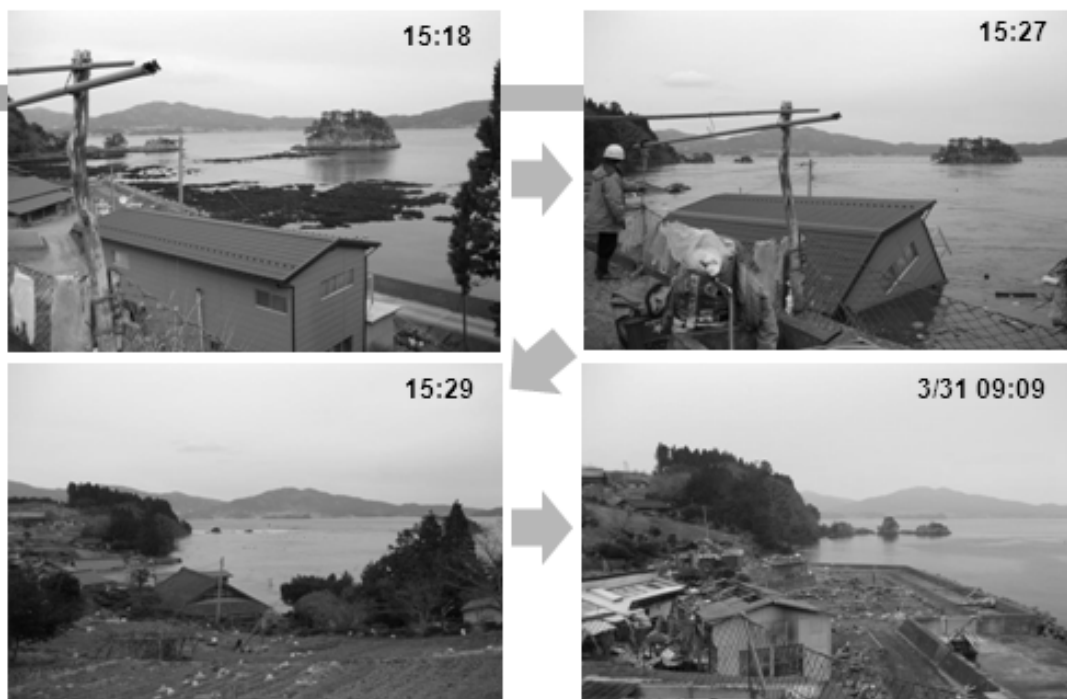
次の写真は陸前高田の古谷というところです。ここに住んでいるＹさんという方が撮られた写真で、これはデジタルですので時間が記録されています。あまり時間が違っていなかったということがわかりましたので、その時間をこの上に入れておきました【写真 〆】。

左上の写真は15時18分【写真次ページ】、これは水が引いてしまった所です。沖にあるあの島の岩礁の部分が下までむき出しになっています。こんなことはないということでこの写真を撮られたのが15時18分、右の写真が15時27分です【写真次ページ】。このときはもう津波がヒタヒタと来て、今見えていた岩礁の部分が大部分水に浸かっています

が、あれが最後はすっぱり見えなくなるまで水が来たというところですよ。

3番目の写真は、さすがに水が来たときにはそこにいると怖いので、高台に上がって写真を撮られたのが15時29分【写真下】。この段階で、この古谷という集落に水が入ってしまっ、岩礁はほとんど水没してしまったということです。水の高さを測ってみましたら、海面から約17メートルという非常に高いところまで水が来ていることがわかりました。右側の写真は3月31日の朝ということになります【写真下】。

津波前後の海岸線の変化(陸前高田市古谷地区Yさん提供)

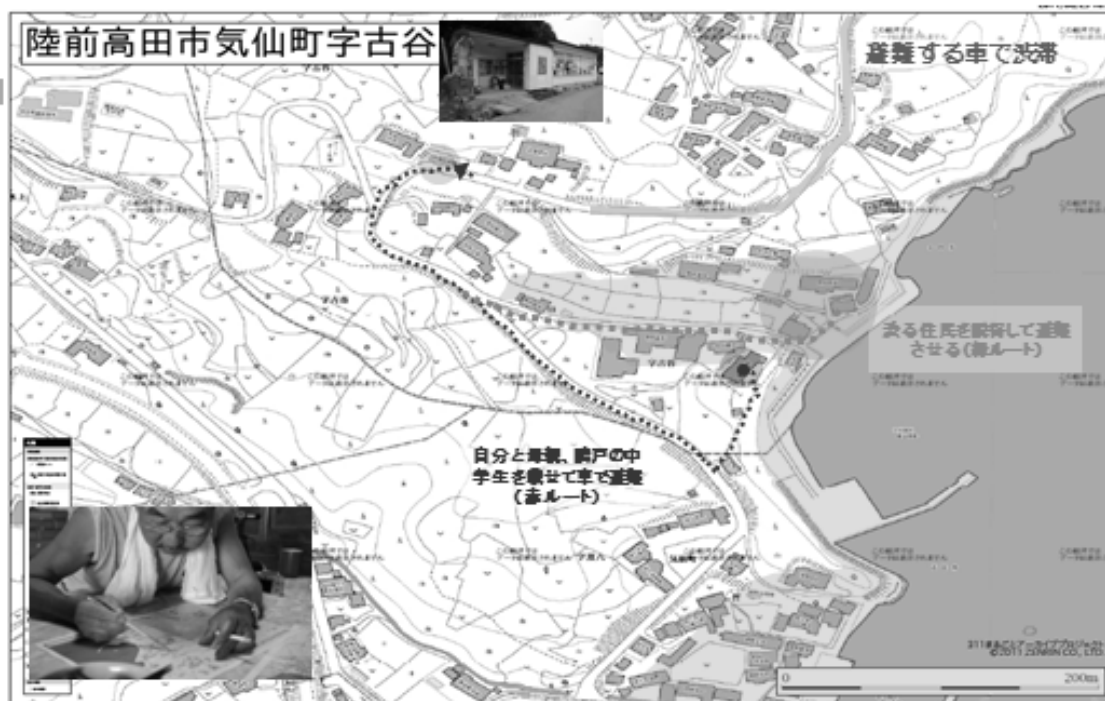


次の写真はV字型の湾が右に開くような形で開いています。次の赤丸の所が写真を撮られた方の家です【地図次ページ】。断崖の上であって、海面から17メートルぐらいの所です。この方は家族を連れて左上にある公民館までこうやって逃げました。隣の家にいる小学生も連れて逃げたということになります。その後、その緑のところに住んでいらっしゃる方に、実はお声をかけたんですがなかなか避難しなかった。それをシブっても避難させたというのがこの緑のルートになります。その次に道路の所です。茶色い所が、上のほうにある港からの車で渋滞していたという状況を示しています。そこに、次の津波が入ってきたということです。

こうやって見てみますと、結果的にこの集落は、下の低いところの家は全部やられてし

まっていますが、けが人一人も出なかったという、地域の方々が連携して避難したという、非常に珍しい所ということになっております。

陸前高田市気仙町古谷集落の津波避難



次は動画です。ちょっと大変ショックが大きい部分もございますので、今回は音声消して再生していただこうと思います。2つこれからご紹介します。

1つ目は大船渡市の齋藤賢治さんのです。実はもう結構この動画が世に流れているのでお名前を出すのですが、「かもめの玉子」という地域のお菓子の会社の方です。そこからよく市街が見えるものですから、そこから撮られた写真です。崖の上に避難されていて、その上から撮られたということになります。

これは今、左のほうへ水が流れてきますが、右側のほうが湾口で、左側のほうが湾の奥になります。こういうふうに家を破壊しながら真っ黒な水が流れ込んできているという、大変ショッキングな映像でございます【写真次ページ上】。この方は、地震が起きた後すぐに従業員と一緒に避難され、結局この会社からは誰もけが人を出さなかったということです。

次は行政が撮られた動画であります。これは岩手県の宮古という所で、市役所がお撮りになった動画です。これもテレビとかいろいろな所で何度も流されているので、ご存じだと思いますが、あそこの堤防を水が越えてこういうふうに入ってきます。すごい映像です

よね。(写真下)

この映像も先ほどの大船渡の映像もそうなんですが、大変よく撮れているのと、とても映像として価値があり、途中に起こっている、例えば携帯電話がプツツと切れる時間だとか、そういうのが全てわかるようになっている、という大変有用なものです。災害の記録としては、過去にないほどいろいろな形で活用できるものではないかと思っています。



次のスライドをお願いします。今ご紹介しましたが、市町村からご提供いただいた写真や画像とか、住民からご提供いただいた画像をうまくリンクして、災害時の状況というのが時間的、空間的にわかるような形にできないかと、eコミマップの表現方法なんですが、立体的に災害がどんなふうにあったかがわかるような仕組みをつくりたいと思っています。

この写真の下の方にありますのが、気仙沼の被災前の写真です【写真次ページ】。右側にあるのは有名なコーヒー店で、私も被災前にコーヒーを飲んだことがあります。あの店も津波で今はもう跡形もないんですが、災害前の記録をだいぶご提供いただいています。この災害前の記録と被災後の記録と場所を合わせて、どう変化したかということがわかるようにする、というのを今目標にしています。

現在、収集している写真は大変多いのですが、これを公開する前にいろいろと手続があり今それを進めております。準備ができ次第、順次これを公開する形で進めていきたいと思っています。



長坂さん、何かコメントはありますか。

【長坂】 今坪川さんから説明がありました通り、コンテンツだけではそこから解釈していろいろな対策とか教訓が読み取れません。実際に体験談と動画と静止画と、そしてどういう経路で避難できたかという地図ですね、これをつくっていくのはなかなか土地勘がないとできません。これは被災地の方と外の方がうまくコラボレーションしてやる。先ほどのようにいろいろな教訓が地域でも検証できますし、それを世界に向けて発信できると思います。収集しながらそれを公開するための編集を、ぜひ地域の方と一緒にやっていくという取り組みをこれから進められればいいと思います。

後はこれを活用するという視点でいきますと、自治体さんからいただいたものも、被災住民の方からいただいた動画とか写真も、全て2次利用となります。編集してさらにそれを発信していくことができるよう、権利処理を全てさせていただいております。インターネットで公開して投稿しているので自由に使えるといっても、よく見るとそれが了解を得て2次利用できるかどうか分からない、というようなものがたくさんあるんですね。それをぜひ今、被災自治体さんと、地域コミュニティ、被災者自らが「これはみんなで使えるものにしよう」という権利の処理を、しっかりしておくことが大事だと思います。ぜひそういった方々を巻き込みながら、これからいっしょに集めていければいいなと思っております。

大船渡市在住の中学生および大船渡市・陸前高田市民対象のワークショップから

【司会】 ありがとうございました。

次は6番目でございます。これはちょっと毛色が変わっており、「大船渡市在住の中学生および大船渡市・陸前高田市民対象のワークショップから」です。大船渡市の中学生とシニアを対象としたワークショップです。動画を、映画を、映像をつくっていただくということでやっていただいております。「今、あなたが伝えたいことは？」というものです。

現在の活動状況は、NTTドコモの社会モバイル研究所と、私どもの防災科研と、大船渡市の教育委員会、NPO法人夢ネット大船渡さん、それからKOMさんなどの協力で、地域で映像をつくろうということをやっております。これは8月に大船渡市の中学生とシニアの方々に集まっていただき、被災地域の住民自身が自分たちの状況を発信することが技術的にできるかということで、実際にやっていただきました。

次は、「3分間の短編映画をつくってみませんか？」というもので、地域で短編映画をつ

くって、自分たちは今こうなっているんだよとか、被災地はこうなんだよという状況を発信するということです。この活動のために、NTTさんがモバイル用の端末としてGALAXY Tabという小さなタブレットを貸していただきました。それを使って子どもたちと一緒にやっているのは東京工業大学の学生さんです。その操作を学生さんたちと地域の方々が一緒にやっています。非常に優れた端末で、すぐ操作を覚えて、次の写真のようにいろいろな所で映像をつくり、映画ができるようになったということです。でき上がった作品は21作品ありますが、今日は2作品を簡単にご紹介したいと思います【写真左：ワークショップの様子】。



【動画再生：写真右】

【外国人ボランティア】 フランスから来ました、フランスのパリという町。20年前から毎年こっちに来るね。奥さんの実家は碁石だから。でも、今年のうち、流されたからみんなと一緒に泊まって、そしてボランティアの仕事しにきました。

【子供】 何でこのボランティアをしているんですか。

【外国人ボランティア】 はい、この所はとても好きで、毎年夏休みに来るから、



そんなひどい津波に遭って、すごく地獄になったから、少しでも手伝うことができた
ら気持ちいい。ぜひなると思っている。

【動画終了】

【司会】 じゃあ、もう一作品あります。「災害を受けとめて（写真下）」というものです。

【インタビュー音声】 5か月間、どのように生活してきましたか。

【男性】 津波の当時は夢中になって逃げま

した。私の家はちょっと高い所なので津波なんか来ないと思っていたんですが、それがその津波の大きな波が押し寄せてきたので、竹やぶを切り抜けて、どんどんとおばあちゃんたちと一緒に逃げました。高いところへ逃げて、写真を撮ったりしました。次の日見たときに、ほんと



これまで生きてきたことを大切にしたい

にがれきに驚いているところです。で、うちも、毎日家に通って、そしてがれきを直したり、自分の家の残されたものを整理したり、ボランティアさんに大変お世話になりながら暮らしてきました。

【インタビュー音声】 今回の災害についてどう思われますか。

【男性】 新聞報道などで1,000年に一度という大津波だということで、みんな驚いています。それから、今までに被ったことのない大きな被害を津波で受けました。けれども、1つの津波というのは地球の営みであるということを捉えると、この津波より大きい津波が来ないということは一つもない。だから私たちはそれに備えて生きていかなければならないと考えています。一つ、お見舞いに来た人に言われたんですが、貝塚は大きな波が来ても来ない所にある。昔の人たちはほんとうにそういう津波を、新聞報道も何もないときに、言い伝えて津波に対応した生活をしているんだなということをつくづく感じました。このような被害に憤るよりも、私たちの人類の生き方について考えるときではないかなって、考えさせられた津波でもあったと思います。

【インタビュー音声】 将来、どのように暮らしていきたいですか。

【男性】 はあ、将来というより、今まで生きてきた80年というものを、ほんとうに私

はこれから大事にして生きたいなと、そう思っています。そして今まで歩んできた道のりにこれからも積み重ねて生きて、大事にしまって、それを保存したり、深く味わったり、そしてこれからの一瞬、一瞬を大切に、人間を味わいながら生きていきたいと考えているのが私の生活です。

【動画終了】

【司会】 ありがとうございます。

じゃあ、これは夢ネットの須賀さんにちょっと、実は先ほどのお子様はお孫さんということなんですけども、お孫さん、いかがでしたでしょうか。

【須賀（夢ネット：写真右）】 娘は神奈川のほうにいますけど、ちょうど夏休みで来ているときに、映画つくってみませんかということで、ボランティアは初めての体験なのでとても喜んで帰りました。

【司会】 ありがとうございます。

やっぱり被災者の方自身が情報を発信することがとても大事だということですね。これからの課題としましては、著作権とか肖像権とかいろいろな問題があります。また、子どもたちはこの大きな災害で大変な心の傷を負っているのではないか、それらをきちんとフォローしながら、どういうふうに情報を発信していくという問題があります。

これを使っては地域同士、住民同士で結構いろいろなコミュニケーションができる。今回は東京工業大学とか、今までこんなことがなければ縁のなかった方々が、災害で映像をつくるということを一つの取り組みにして大きくつながっていく、という結果が出ています。ぜひこういう取り組みを広げていただけないかなと思います。

長坂さん、何かコメントありますか。

【長坂】 きょう、今、ニコニコ動画でこのシンポジウムが流れているのですが、BGMの著作権とかは大丈夫？ あっ、オーケーなんですね、というような心配をしなくてもいいBGM集なんかも、ぜひ全国から参加型でプレゼントしていただきたいです。逆に被災して流れてしまって廃校になった小学校とか中学校で、著作権が切れた校歌とかを、例え



ばバイオリンバージョンだとか、ハーモニカバージョンだとか、オルガンバージョンなんかで演奏していただくことも、絆づくりになります。また楽譜をこのホームページに公開しておいて、それを全国からいろいろなバージョンで録音して、音声ファイルとしてプレゼントしていただく、というのもあるのかなと考えております。

行政の災害対応資料のアーカイブ～まずは遠野市から

【司会】ありがとうございました。

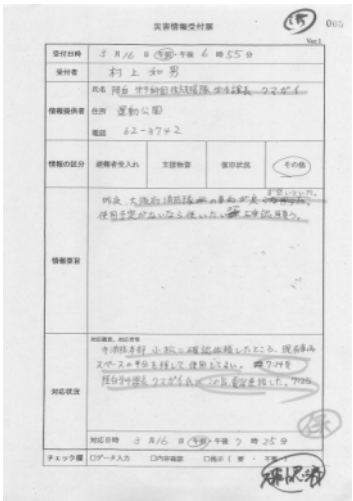
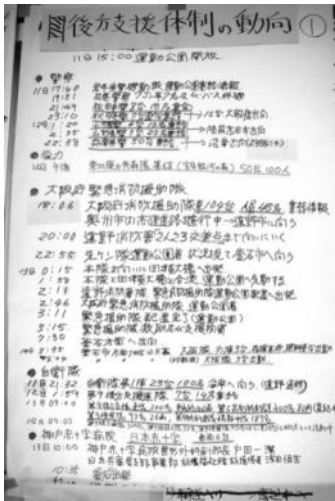
続いて7番目です。これは「行政の災害対応資料のアーカイブ」ということです。最初のチラシでは「遠野市等三陸地域地震災害後方支援活動のアーカイブ」となっていますが、実は遠野市だけではなくて、岩手県の被災自治体の中で遠野市さんが果たした後方支援の役割が非常に大きかったということで、ここと他の自治体とがどういうふうな関係にあったのか、ということを検証する意味も含めて、行政資料をアーカイブさせていただくという形をやっております。

先ほど遠野市の本田市長からお話がありましたように、遠野市の地の利というのを生かして、こういう広い範囲でご支援いただいたわけです。その遠野市を通じて支援に来た自治体というのは、この日本列島の地図にあるように、たくさんの自治体、地域の方が今日ここにもいらっしゃっていると思うんですが、遠野市に入ってこられて活動しているという状況であります。

行政資料と言いましてもいろいろあって、まず災害が起こると必ず災害本部にはこういう壁紙というか、白い壁に何時に何があったということをたくさん書かいて、ペタペタ張られるわけですが、これもきちんと残す。この壁紙記録というのは、遠野市さんに貴重な

記録としてたくさん保存されていたので、これを撮影させていただきました【写真左】。

それから、情報受付票というのは遠野市さんがつくられたもので、いつどんな連絡があったかということを定型の書式にして記録し、次から次へと関係者に回すという処理



をされていました【写真右】。この2つの記録が残されていたので、これを全部デジタル化して、何時何分に何が起きていたのかというのを整理したものが、このタイムラインというものです。これはなかなか結構大変な作業でした。

行政の今の職員の方々は普段の業務で忙しいものですから、なかなか対応が難しく、東京工業大学の大学院生、それからここに写真はありませんが、中央大学の学生さんにもご協力いただいて、これをアーカイブするという事で、スキャンしてPDFにして、かつワードのファイルに入れるという作業をしました。これによって、遠野市で何時の頃にどんなことが起こったか、ということがわかるようになりました【写真下】。

遠野市タイムライン			
日 時 分	重要事象	出来事・被害状況	遠野市 行政対応
3月12日 16時		＜地＞米到着(10kgx10袋)そば3箱、本つゆ9本、みそ2袋	第6回本部会議
3月12日 17時			申告受付??(文字不明)の延期(16:00)
3月12日 18時		停電、一部地域が18:45頃復旧見込み(18:37)	＜地＞打合せ大船渡区の方。他市の受入ー第1上中、第2南中、第3青地区(18:40) 大阪府緊急消防援助隊が遠野運動公園に22:30頃に入るとの遠野消防からの情報(18:40)
3月12日 19時			大船町への救援物資を置いて帰る(19:45)
3月12日 20時		＜地＞道かい夕食、保健士遠野病院へ連れて行った大船町の方、糖尿病のため受?(文字不明)ー入院(20:00) ＜地＞青巻駐在所警官原さん来庁(8:20)	遠野消防署「さんさろ交差点」まで大阪府緊急消防援助隊を迎えに行く(20:00) 市民センターで米30kg炊き出し作戦に入った。(20:30)
3月12日 21時		市内一帯地域の電気が復旧 市役所庁舎内も通電(20:50) ＜地＞電気復旧した(21:05)	
3月12日 22時		兵庫県警90台集結ー沿岸出向(22:38)	おにぎり400個差し入れ(22:00)
3月12日 23時		兵庫県警/シカーワゴン19台 大型バス5台釜石救援のため運動公園到着(22:55)ー上とだふり?	先遣隊(大阪府緊急消防援助隊?)運動公園署 状況を見て釜石市へ向かう(22:55)
3月13日 0時			兵庫県警/シカーワゴン19台大型バス5台釜石救援のため運動公園到着(22:35)
3月13日 1時			本隊(大阪府緊急消防援助隊?)を迎えに田舎大橋へ出発(0:15)
3月13日 2時			本隊(大阪府緊急消防援助隊?)と田舎大橋で合流。運動公園へ先遣する(1:58) 遠野消防署隊大阪府緊急消防援助隊を運動公園配置へ出発(2:11)
3月13日 3時			大阪府緊急消防援助隊 運動公園署(2:46) 大阪府緊急消防援助隊 配置完了104台 403名 運動公園などへ集結(3:11) 遠野消防による大阪府緊急消防援助隊の先導及び運動公園内安全管理
3月13日 4時			大阪府緊急消防援助隊激励及び支援物資(3:15)
3月13日 5時			
3月13日 6時			＜地＞副市長より他市の受入場の確保、炊き出しの確保のお願い(6:30) ＜地＞集合打合せ(7:00)

今後の展開ですが、やはり記憶が薄れないうちに市の職員の方々にどんなことが起きたのか、これは各自治体でも取り組まれていると思うんですけども、アンケート調査とかインタビューをして、きちんと記録を残す必要があるのではないかということです。これによって空間的な後方支援ですとか、連携調整機能に問題がなかったかとか、課題がなかったかということを確認し、これから遠野市さんと同じような役目を果たす自治体が、どういうふうに対策を取るのか、ということがわかるような形にしたいということです。

これにつきましては、遠野市さんの後方支援のご担当である菊池さん、どうぞ一言。

【菊池（写真右）】 遠野市の後方支援室の菊池と申します。



こちらの資料にもある通り、壁紙で約60枚以上、そして定型の紙で2,000枚以上あります。どうしても職員の数も限られますので、ボランティアの方々にお願いして保存等、記録等を取ってまいりました（写真下）。今後の展開としては、職員の方々の記憶のタイムラインの隙間を埋めていく作業に、取り組んでいければと考えております。（拍手）



被災地の写真映像記録ボランティアの活動～延べ500人の協働

【司会】 ありがとうございました。

次は8番目です。今この会場でも写真を撮っていただいています、この災害の記録を残すという作業のために、全国からボランティアの方々に被災地に入って写真を撮っていただきました。目的としましては、被災地の災害、被害の全体像を把握して、復興に向けての変化を記録するということです。全国から延べ500名というたくさんのボランティアの方々に、記録ボランティアというのをやっていただきました。彼らは自費でこちらへ来て、泊まって、自腹で全部活動していただきました。

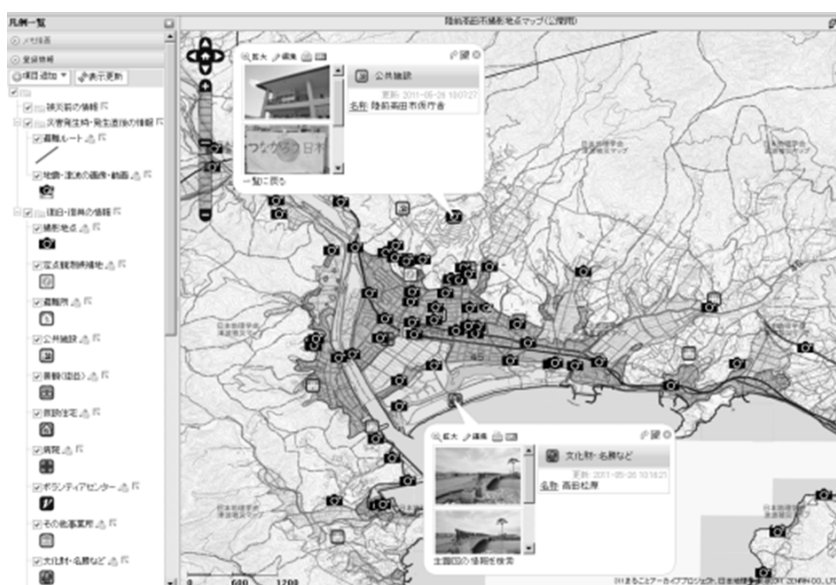
デジタルカメラで被災地のまちなみ、避難場所、重要公共施設、鉄道や道路、橋梁、港湾、堤防、文化財、生態系、復旧・復興活動等を撮影して、位置情報を付与してインターネット上の地図で公開する。位置情



報を取るためのGPSロガーという機材を、防災科研のほうでご用意させていただいて、それで撮っていただきました。次のページに今まで撮られた写真の枚数が、6万7,580枚と載っております。ちょっと地域によってデコボコはあるのですが、一応撮られているという形になります。

次に活動の様子、こんな形で写真を撮られているということになります。陸前高田で撮られた写真が次のページにあります。ここにカメラのマークで黒い点ですね、これが定点でここの変化を追っていけば、災害被災地が復興していく過程がわかる形になっています【写真右】。

やっぱり復興していく過程ではいろいろな計画の変更だとかが出てくると思いますので、定点が必ずしもいいとは限りません。時々見直す必要があるということです。それから、とても長い期間にわたると被災地が変わっていきますので、最初の半年ぐらいで写真が



撮られただけではとても終わらない。これから1年たち、2年たち、どんどん変わっていきますので、継続的に息の長い活動にご協力いただけるようなボランティアの方々に入ってください仕組みが必要と思われます。これも動画が確定しましたら、徐々に公開するという形で進めております。

続きまして、今日、来ていただいた方に一言ご発言をいただきたいと思いますが、はい、お願いします。

【吉岡（記録ボランティア:写真右）】 東京から参りました吉岡と申します。私は東北・山形の出身で、今回の震災、自分でも何かできないかなと思って、この記録ボ



最初、陸前高田のほうに行ったのですが、これが300キロの沿岸がずっと続いている
 と思うと、気の遠くなる思いを最初はしました。それを何とか、これからまた起こり得る
 地震とかに何か役に立てればなど、どんなものでもいいので、もうとにかくすべて撮り尽
 くそうという思いで今回参加しました。今後もまた長期的にその活動に参加できればな、
 と思っております。(拍手)

【司会】 ありがとうございます。これをニコニコ動で見てらっしゃる方がいて、我もという方がいたら、ぜひお声を上げていただければと思います。



大船渡市

ともに創る 三陸の地に輝き躍動するまち 大船渡

サイトの検索
キーワード検索

検索

トップページへ戻る | サイトマップとお問い合わせ | お知らせとさいがいウェブエム

お知らせとさいがいウェブエム

お知らせとさいがいウェブエム

3月31日より、生活に開通したお知らせなど、各種情報を放送しています。

名称 JOY22-FM お知らせとさいがいウェブエム
周波数 78.5MHz(北80.5MHzカル)

月～金曜日 9:00～、12:00～、15:00～、土曜日
放送時間 9:00～
(概ね2時間枠)

過去の放送内容

放送日	放送内容
9月20日(火)	共通のお知らせ(PDFファイル、47KB) 大船渡市のお知らせ(PDFファイル、23KB) 陸前高田市のお知らせ(PDFファイル、20KB)
9月21日(水)	共通のお知らせ(PDFファイル、46KB) 大船渡市のお知らせ(PDFファイル、21KB) 陸前高田市のお知らせ(PDFファイル、34KB)
9月22日(木)	共通のお知らせ(PDFファイル、53KB) 大船渡市のお知らせ(PDFファイル、23KB) 陸前高田市のお知らせ(PDFファイル、22KB)
9月24日(土)	共通のお知らせ(PDFファイル、53KB) 大船渡市のお知らせ(PDFファイル、22KB) 陸前高田市のお知らせ(PDFファイル、22KB)
9月26日(月)	共通のお知らせ(PDFファイル、52KB) 大船渡市のお知らせ(PDFファイル、21KB) 陸前高田市のお知らせ(PDFファイル、20KB)
9月27日(火)	共通のお知らせ(PDFファイル、56KB) 大船渡市のお知らせ(PDFファイル、28KB) 陸前高田市のお知らせ(PDFファイル、22KB)

PDFファイルの表示には、AdobeのAdobe Readerが必要です。入手はこちらから

このページのお問い合わせ先

秘書に担当
電話番号: 0192-27-3111
FAX番号: 0192-26-4477

このページの著作権

・ サイトマップ ・ リンク集

大船渡市役所 〒022-8501 岩手県大船渡市船折字津野沢15 電話:0192-27-3111
Copyright © 2011 Ohta City All rights reserved.

-32-

だいていますが、「せんだいメディアテーク」とかの同様のアーカイブ組織と連携したいということです。今後の展開としましては、音声ファイルというものをどう活用するのかというものがあります。放送されているのがかなりの時間量ですので情報量が多く、これをどう活用していくのかという問題があります。これについて佐藤さんはいらっしゃっていますでしょうか。ぜひコメントをお願いします。



【佐藤 (写真左)】 「おおふなとさいがいエフエム」の佐藤と申します。よろしくお願いします。各関係組織との連携についてですが、こちらかなり市役所からの重要な情報、データを放送で流していますので、確実にアーカイブをして後世に残して今後の対策に使っていただければと思います。

私はもともと放送の経験はなくて、治療院の院長をしていたのですが、開局からFM放送のほうに携わらせていただいています。私自身も先ほど大船渡の齋藤製菓さんの動画にもありましたが、あそこのすぐ脇にあった治療院が全て流出し

ております。私も避難所生活、現在は仮設生活をしていく中で必要な情報を皆さんに伝えたい、同じ目線で情報提供を災害からずっとさせていただいています。ほんとうに有用性を感じていますので、これからも各団体さんと連携を取って、市民参加型の放送になればよりいい情報が流せるんじゃないかなと思っています。

ありがとうございます。(拍手)

【司会】 ありがとうございます。それでは、その災害FMの大先輩である「エフエムわいわい」の日比野さんに一言お願いします。

【日比野 (写真右)】 神戸から参りましたエフエムわいわいの日比野です。今回、私たちは災害FMで放送している内容を同時に録音できるよう、パソコンとハードディスクを北から南までお渡ししてきました。これは17年前、当時私たちがやっぱりできなかった、失われた記憶はもう取り戻すことができない、という思いでやっていったんですね。

それともう一つ、今佐藤さんがおっしゃっていましたが、最初は災害の情報ですけど、少しずつ、少しずつ



つその地域のまちの人たちがいろいろなことを語り始める。遠野というのは民話の古里ですけれども、ラジオは実の話を伝え、その話の輪をどう残していくのかと、それを今後どう活用していくのかというのが、とっても大きな課題だと思っております。(拍手)

被災地の災害ボランティア活動と体験談のアーカイブ

【司会】 ありがとうございます。日比野さんには第3部でもぜひご発言いただきたいと思えます。

それでは次が10番目、「被災地の災害ボランティア活動と体験談のアーカイブ」です。今回も全国からたくさんのボランティアが被災地に入りました。ボランティアセンターでの活動内容、ボランティア体験談というのをアーカイブして、どんなボランティア活動をしたのか、あるいはボランティアセンターでどんな問題があったのかということをはっきりさせるために、そのへんを集めようということです。

実は、宮城県のボランティアセンターは、宮城県の社会福祉協議会を通じて、私どもが少しシステム的な支援をさせていただいた関係で、たくさんのボランティアの方々に情報の面で支援させていただきました。そこで、ボランティアの方々にネットワークで声をかけて、いろいろな形で意見を投稿していただくというのをウェブサイトでやっております。

ボランティアで情報支援をしていますと、やはり地域で使ったいろいろな「どこどこではこんな活動をしました」「こんなニーズがありました」というような生の声があり、それらを含めてたくさんの情報が上がってきます。これらを集めて、地理的に「このところではこんなことがあったんだ」ということをわかるようにしたい。

今後の課題ですが、今、宮城県で動いていますが県の被災地によっては、いろいろな災害ボランティアのまとめ方、中心に活動されたボランティアセンターの役割だとかが随分違いますので、それらをどうまとめて分析するかという課題があります。また、市町村社協を通じて取材するというので、いつどんなことがボランティアセンターで行われていたかという運営の記録についても、まとめておく必要があると思います。これらを含めて生活支援活動の記録、整理をする、仮設住宅に入られた被災者の方々が大部分多くなっています、その方々への生活支援活動についても記録していくということがあります。

このボランティアの支援をしているということで、池田さんに一言ご挨拶していただきたいと思えます。

【池田（写真：次ページ）】 ご紹介にあずかりました池田と申します。今、宮城県のボラ

ンティアセンターでは、災害ボランティアセンターのホームページをeコミュニティ・プラットフォームでつくっております。災害ボランティアセンターのスタッフさんが日々ブログを更新したり、災害ボランティア活動の記録を取っております。皆さんは、当然記録を取るという意識を持っている方ばかりではないと思うんですが、常に自分たちの情報発信を行うということが、そのまま記録を取ることにつながっているという点において、アーカイブスという形で今回ご紹介いただいております。

今後ですが、多様な情報がこうやって発信、記録されていく中で、しっかりとまとめていくこともまた大事になると考えております。応援、よろしくお願いします。(拍手)



地場産業の復興アーカイブと民間コマースサイトとの連携

【司会】 ありがとうございます。地域でボランティア活動をされた方で、この放送を見てらっしゃったら、ぜひ皆さんの体験を声として投稿していただければと思います。

次は11番目、「地場産業の復興アーカイブと民間コマースサイトとの連携」というのがあります。これは被災地の地場産業が災害でやられてしまい、それをどうやって復興していくのかという過程がとても重要になります。これをアーカイブしようということです。

今日、最初にご紹介しましたKOMなどのチームが、実際に被災地の復興過程を取材し、インタビューして記録を残すという形で配信しています。やっぱり被災地のいろいろな製品、例えばお酒ですとか食料品ですとかの正しい情報が発信されていけば、とてもおいしい物がこちらにはありますので、三陸地方のとてもいい物を全国のいろいろな方々が安心して購入できる形ができ上がれば、被災した産業もうまく復興していくんじゃないか、そのための商品購入の仕組みをつくろう。今すぐにはなかなか品物はできないけれども、1年先には工場が立ち直るから、そのころには買えるんじゃないか、という少し先取りした情報も流しています。

取り組みの写真が出ています。工場へ行って今こんな形でやっていますよと、これは味噌ですけども、それをウェブで公開するというものです【写真次ページ】。

これに関しまして実際に取材したKOMの皆さん、どうでしょう。地場産業の復興過程で実際に苦労されていることに、何かコメントはありませんか。こんな現場を見たとか、

何かあったらぜひ一言お願いします。若者の声で、はいどうぞ。



【遠野 (KOM: 写真下右)】 今までにもいろいろな企業のほうにお伺いして、インタビューしてきたんですが、今後も、まだまだ復興させ再開している会社とかもあるので、被災前みたいに再開できるのかをいろいろ聞いていきたいとも思います。後は、今後どうしていきたいとも思いますので、そういったところも伺

って自分たちのホームページにアップしていきたいと思います。(拍手)

【司会】 ありがとうございます。
した。

【台 (KOM: 写真左)】 とても陸前高田が大好きなので、地元
の復興に少しでも貢献できるように若い力で頑張っていきたい
と思います。よろしくお願いします。(拍手)



測量車両による360度映像と測量のアーカイブ

【司会】 ありがとうございました。何か優等生のような発言になってしまいました(笑)。

災害が起きると、大きな企業だけが生き残るのではなくて、ほんとにこれをひっくり返して、逆に今まで知られていなかったものが全国に名前をアピールするいいチャンスだと思うんですね。そういう意味で地場産業が活性化すること、被災地の復興経済を支える肝になりますので、ぜひそこは皆さん、ご協力いただけないかなと思います。

あと二つになりました。12番目「測量車両による360度映像と測量のアーカイブ」、これは実は車に360度写せるカメラと、GPSといって位置を記録するものとを搭載して、被災地の映像というのを撮影し、被災後の写真、それから復興していく過程を写真で記録し、津波の痕跡とかそういう研究に使えないかということです。

ここは技術的な問題があり、「NTT空間情報」さんに協力してやっていただいています。陸前高田市などの市内を走破してデータの編集作業を実施するで、車の上にこういうちょっと不思議なやぐらを組んで、アンテナを張って走りながら被災地の状況を記録していきます【写真右】。

これは「NTT空間情報」さんの高橋さん、お願いします。

【高橋（写真下）】 「NTT空間情報」の高橋と申します。今日は東京から参りました。実はNTTもなかなか認知されないのですが、被災企業なんです。津波では70のビルが浸水倒壊で、6万本の電柱、マンホールに被害がありました。



我々も3・11以降、こういった空間情報を自ら整備しており、今回、防災科研さんを通じて陸前高田さんと大船渡さんの行政からも要請があつて、先ほどの景観測量作業、これはただ単に映像を撮る車両じゃなくて、緯度・経度、あと高さ、X-Y-Z軸が誤差十数センチ程度の精度を誇って撮れるアーカイブです。

まだ全エリアを走行して撮り切れていません。ちょっと精密機械的な車両で、浸水の所があるとすぐに壊れてしまう部品がありますが、ぜひとも海岸部すべてをNTTとしても撮っておきたい、それを行政さんと官民連携の形としてアーカイブを残していきたいと思っております。よろしくお願いします。（拍手）

復興情報杭とスマートフォン等による復興過程の定点撮影とフィールドミュージアム構想

【司会】 ありがとうございました。

いよいよ最後になりました。「復興情報杭とスマートフォン等による復興過程の定点撮影とフィールドミュージアム構想」という、また片仮名が並んでしまいました。先ほど、復

興していく過程を写真撮影で定点観測するという話をしましたが、これは、記録した写真そのものを、その現場で見られるようにするために、復興情報の杭というのをつくっておく。そこで撮られた写真とか、昔の写真とかを杭の上にQRコードというもので記録して、そこへ行ってスマートフォンとか携帯電話をかざして写真を撮ると、その情報が出てくる。ここは以前はどんな所であったのか、被災直後はどうなっていたんだということがわかるような記録をする、ということになります。

舞台の左手にありますのが現物の復興杭です。結構大きいものだと思うんですが、その



杭を地面に打ち込んで、その情報を記録するという形になります。そこに携帯電話をかざし



ます。杭の建立式の写真が出て

いますが、そういう形で撮られたものです【写真上】。

課題としましては、復興杭というものを設置するためには場所が要ります。たったこれだけの土地なんですが、やっぱり土地に物を残すためには許可というか手続が必要なのです。また、これはICタグに対応させるために今はQRコードで代用していますが、スマートフォンではまだICタグには対応していない、という問題があります。一応現在1,000本を目指して、大船渡市、気仙沼市、陸前高田市でも展開できないかと考えています。それから、ここにこういうものがあれば、観光に来た方がその杭の上で自分がそれをかざすことで、「あっ、ここはこういう所だったんだな」ということがわかって、地域の観光資源



にもなるのではということです。

この杭を含めて、民間企業の協働がとても欠かせない状況になっており、(株)リプロの岡田さんにぜひコメントをお願いします。

【岡田】 株式会社リプロの岡田と申します。杭はただの

杭ですが、QRコードとかICタグを埋め込んで、デュアルとかいろいろな用途に使える杭です。そういう現場の認識としては杭が非常にいいもので、あとはそういう仮想空間と現場の杭をうまくつなげて、情報を現地でその位置で取りまとめるということを考えています。杭もたいしたものではないんですが、大分のNPOさんとかとペットボトルのキャップを集めて杭をつくっていく、そういうリサイクルで皆でやっております。

今後の課題としては、やはり杭を勝手に打つというわけにはいきませんので、各市町村さんにご協力いただいて、効率のよい設置をしていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。(拍手)

在福島民放テレビ局フィルム素材の救済

【司会】 ありがとうございます。

皆さんが飲んだペットボトルのキャップが溶けてあの杭になるんですね。そう思ってぜひペットボトルをたくさん消費していただいて、被災地の支援につながればいいですね。

すみません、追加がございました。その他ということで、「在福島民放テレビ局フィルム素材の救済」というのがあります。福島にある民放テレビ局の開局以来のフィルム素材、今はデジタルになっていますけれども、フィルムで記録した素材が結構あり、これが津波の被災に遭い、専用の保管庫から本社社屋に一時避難しているという状態であります。このタイトルが2,000タイトルあるということで、とても重要な記録です。

このフィルムは、テレビ局が撮影した1963年頃から20年間の福島の記録ということで、カタログを見たら何か東京オリンピックも入っているような古い記録のようなものです。これらのフィルムが失われないようにするためには、オリジナルのフィルムを保管するだけでなく、これをデジタルに変換して、なくならないような形にする作業が必要です。これについて、ぜひご協力いただけたところがあったら名乗り出てくださいかな、というのが私どもの思いでございます。

ご存じのようにこのアーカイブという取り組みは、どここの会社が仕事としてやるというのではなく、それぞれが協働でやるという形になりますので、我こそはという方は、自分のできる肩幅で手を挙げて参加していただけないかな、というのがお願いでございます。これは吉見先生、何かコメントをお願いできますでしょうか。

デジタルの時代であっても、現物のフィルム保存はとても大切



【吉見】 今、ご説明あった通りだと思うんですけど、これは別に福島放送だけじゃなくて、東北のいろいろな放送局やラジオ局で放送素材をどうやって記録するか、残していくかという問題があると思うんです。

今、デジタルっていう話がありましたけれども、デジタルもそうなんですが、現物のフィルムの保存ってとっても大切なんですね。現物のフィルムは温湿度管理をちゃんとしないと、ワカメのようになります。ワカメってだんだん腐って酢酸臭を発してきますから、現物を残しておくスぺ

ースをどこにちゃんとつくとか、さっきのいろいろな記録もそうなんですがデジタルにすればいいっていう話じゃないんです。そうじゃなくて、人々のアルバムとか、人々の残したいろいろな物を、ちゃんと現物で残すということを同時にしないとイケない。

これもその例で、デジタル化はもちろん大切ですが、この現物のフィルム、原板そのものをどういう場所に、温湿度管理する場所にちゃんと残していくのか、東北のいろいろな遺産そのものを残していくということを、ちゃんと考えないとイケないと思いますね。それがデジタル化というときに一つの落とし穴があって、やっぱりデジタルで解決つくと思うなよって、物を残せよということをあえて今ちょっと発言させていただきました。

【司会】 吉見先生、ありがとうございました。この後、吉見先生には第3部でも大いに吠えていただかなければなりません、遠野はとても寒い所だということで、遠野市に冷凍保管庫を設置していただけるとありがたいと、個人的には思ったりするのですが……。

ということで、第1部ではアーカイブでのいろいろな取り組みをご紹介いたしました。何度も申すようですが、アーカイブというのは協働の取り組みで、私ども防災科学技術研究所はその一つの部分を担っているだけに過ぎません。多くの方々にご協力いただかないとアーカイブは回らないという状況になります。ぜひ皆様のご協力をいただきたいと思います。

このアーカイブのページというのは、今見られるようになっています。これの活用につきましては、この後の第2部で、集めたものをどうするかということを8人の方々にご登壇いただいて、ご議論いただこうと思います。

第1部、どうもありがとうございました。(拍手)

(休 憩)